中央大学社会科学研究所年報　第 26 号（2021）

フィールドワークの“想像／創造力”
――惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”（3）――

新　原　道　信*

Imagination/Creativity of Exploring Fieldwork: “*Comparatology* of Nascent Moments/Processes” Responding for/to the Multiple Problems in the Planetary Society（3）

NIIHARA Michinobu

How do we create the “wisdom of coexistence（saggezza di convivenza）” that are responding for/to the multiple problems on the planet Earth? How do we create the “wisdom” that allows us to experience the planet Earth as a composite “sea” and society as “islands” floating in it?

How we are perceiving/sensing/becoming aware and responding/sympathizing/resonating to the to the “screams of dissonance（le grida disfoniche）” of the Earth, of other creatures, of other human beings, simultaneously and continuously, breaking the apparent “harmony” and “stability”? How is it possible to “being there by accident at the nascent moments in which critical events take place”?

Can the imagination/creativity of Exploring Fieldwork in the Planetary Society respond for/to this challenge? What are the conditions for that? What conditions are needed for Exploring Fieldwork to grasp the planetary society?

But now we are facing a proliferation of ‘barrier’ and Coronavirus Disease 2019（COVID-19）. It is necessary to rethink the Planetary Society that enabled Fieldwork toward the borderland/ and the way of being researchers there.

What will be the “field” to explore for the “planetary society” with “the global field and its physical boundary”, especially for difficult “solving” problems such as the ‘proliferation of barrier’ and ‘pandemics’?

How can we explore fieldwork that redefines, reconfigures and recompose the ‘field’ itself?

This article evolved from a research project called “Sociological Explorations on the *Comparatology* of nascent moments/processes responding for/to the multiple problems in

＊中央大学文学部教授

the planetary society" which is a part of the European Research Network's activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea that exploring, against the tide of the disposition to dissociate/disengage oneself from what is happening, "Co-creating the Communities and Co-becoming communally for the Sustainable Ways of Being" is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, we are exploring unsymmetrically, contrapuntally and poly/dis-phonically on the planet Earth and on perceiving and responding for/to the multiple problems of the planetary society. The article reflects on the <epistemology/methodology/methods/data>developed from dialogue with Alberto Melucci, Alberto Merler, Andrea Vargiu, Anna Fabbrini-Melucci.

キーワード：惑星社会，内なる惑星，フィールドワーク，うごきの比較学，「壁」の増殖，パンデミック（COVID-19），共存・共在の智，臨場・臨床の智，異境の力，受難者／受難民，メルッチ，メルレル

【目次】

1．はじめに――学術的な問いと本稿の位置
2．“うごき”の場に居合わせるフィールドワークの試み
3．「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」とフィールドワークの再定義・再構成
4．「人間の境界線の揺らぎ」――人間と社会の再定義・再構成
5．「闘技場」としての身体をめぐる“予感”
6．ヨーロッパの“境界領域”からの“予感”
7．おわりに――“多系／多茎”のフィールドの想像／創造にむけて

可能性のフィールドが，ある一定の範囲をこえて拡張すると，境界（boundaries）の問題は，個人的および集合的な生活にとって最重要となる．その背後には，選択，不確実性，リスクといった問題があり，この問題は，複雑性の超高度化したテクノロジーのシナリオのなかで，人間の体験の限界 ―― そして自由 ―― を新たなものにしている．社会が自らを破壊できる力を備え，何ら保証もない選択に個人の生活が依存しているような時代において，どこに私たちの境界線を置くのか，これが人間生活の向き合うべき課題である．今日では，私たちの境界線をどこに置くかは，意識的なことがらとなり，私たちが持つ限界を受け容れる自由（free acceptance of our limits）ともなった．

A. メルッチ『プレイング・セルフ ―― 惑星社会における人間と意味』より[1)]

1） Melucci, Alberto, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York:

1．はじめに ――学術的な問いと本稿の位置

本稿は，中央大学社会科学研究所のヨーロッパ研究ネットワーク[2)]を母体として着手された共同研究チームである「うごきの比較学（“Comparatology” of nascent processes/moments）」（2019 ～ 2023 年度）の 2021 年度の研究成果の一端を示すものである．研究チーム「うごきの比較学」は，イタリアの社会学者 A. メルッチ（Alberto Melucci）の“惑星社会論（vision of planetary society）”と A. メルレル（Alberto Merler）の“社会文化的な島嶼性論（visione di insularità socio-culturale）”に基づき，「可視的局面」の背後で不断に醸成されている「潜在的局面」の“うごき（becomings, metamorfosi）”と社会そのものの変動（transformation/transcendence/changing form/metamorphose）の動態を把握することをめざしている．とりわけ，個々人の深部における微細でリフレクシヴ（再帰的／内省的／照射的）な“うごき”に着目し，その“うごき”に応ずるかたちで，領域を横断して新たな問いを立てる“比較学（Comparatolgy, comparatologia）”の創出を企図するものである．

“うごきの比較学（“Comparatology” of becomings）”は，「ビッグデータ」を駆使した comparative study, comparative methodology（対象との相対的距離を確保した計測・観測）とは異なるアプローチの構築をめざす[3)]．

本研究チームが，近年の人間と社会の“うごき”で重要なものと考えたのは，移民・難民，障がい者，老人・女性・LGBT・子どもたち等のマイノリティが“受難者／受難民（homines patientes）”となる“「壁」の増殖（proliferation of ‘barrier’）”であった．可視的な現象としては，

Cambridge University Press, 1996（＝新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ―惑星社会における人間と意味』ハーベスト社，2008 年，78-79 頁）．

2） 1996 年より継続しているヨーロッパ研究ネットワークと，同ネットワークを母体とする共同研究チームである「3.11 以降の惑星社会」（2013 ～ 2015 年度），「惑星社会と臨場・臨床の智」（2016 ～ 2018 年度）については，新原道信「“惑星社会のフィールドワーク”の条件―惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”（1）」『中央大学社会科学研究所年報』24 号，2020 年，127-160 頁を参照されたい．

3）“うごきの比較学（“Comparatology” of becomings, “Comparatologia” di metamorfosi）”については，下記の論稿を参照されたい：

・新原道信「『うごきの場に居合わせる』再考―3.11 以降の惑星社会の諸問題に応答するために（3）」『中央大学社会科学研究所年報』20 号，2016 年，15-32 頁．

・新原道信「“うごきの比較学”にむけて―惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求（1）」『中央大学社会科学研究所年報』21 号，2017 年，67-93 頁．

・新原道信「“うごきの比較学”から見た国境地域―惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求（2）」『中央大学社会科学研究所年報』22 号，2018 年，15-31 頁．

・新原道信「コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワークの意味―惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求（3）」『中央大学社会科学研究所年報』23 号，2019 年，23-59 頁．

メキシコ－アメリカの「壁（barrier,muro）」の建設，ヨーロッパをめざす移民・難民に対する国境封鎖とフェンスの建設，日本でもヘイトスピーチや入国管理センターでのハンガーストライキ・死亡事件が起こっている．地球規模の「経済危機」「気候変動」「災害」「パンデミック」「国際紛争」「核戦争」「遺伝子操作」等々の“グローバル社会で生起する地球規模の諸問題（global issues）”によって，日常生活者はたやすく“受難者／受難民”へと転換する．これらの諸問題（global issues）は，対処療法では「問題解決」できないような，“多重／多層／多面”性を持っており，諸問題の背後にある分断，強権，相克，衝突，相互監視などの“原問題／問題の源基（underlying problem）”もしくは“根本問題（fundamental problem, problema fondamentale）”を切り出し，問いを立て直す必要に迫られている．

こうした問題意識から，2018年12月8日に中央大学駿河台記念館にて行われた第27回中央大学学術シンポジウムでは，「地球社会の複合的諸問題への応答（Responses to the Multiple Problems in the Planetary Society）」（主催・中央大学社会科学研究所）をテーマとした．その成果は，シンポジウム叢書として刊行されたが，同書の序章においては，「なぜいま社会科学を“惑星／地球／社会”から始める必要があるのか」という観点から，「惑星地球」規模に広がった社会の“根本問題”を捉える理論と方法についての考察がなされた．序章に続く第Ⅰ部では，本研究チームの〈エピステモロジー／メソドロジー／メソッズ／データ〉である“うごきの比較学”による“惑星社会のフィールドワーク（Exploring Fieldwork in the Planetary Society）”に基づく考察がなされた．ここでは，ランペドゥーザ島，石垣島，トリエステとイストリア半島，立川・砂川，大久保などをフィールドとして，フィールドワークは，いかなる条件によって現代社会認識に寄与するのかについての考察がなされた[4)]．

そのうえで，本研究チームは，“「壁」の増殖”に対する新たな“問いかけ”として，異質な他者・生物・環境との“共存・共在の智（saggezza di convivenza, wisdom of coexistence）”をめぐる“うごき”の比較研究を構想し研究活動に着手した．しかしながら，“うごきの比較学”による“惑星社会のフィールドワーク（Exploring Fieldwork in the Planetary Society）”は，「新型コロナウイルス感染症（COVID-19, Coronavirus Disease 2019）」のもとで，その意味を根本から問い直す必要に迫られた．2020年度の論稿（新原道信「“フィールドに出られないフィールドワーク”という経験 —— 惑星社会の諸問題に応答する“うごきの比較学”（2）」『中央大学社会科学研究所年報』25号，2021年，45−78頁）においては，“「壁」の増殖”に加えて，「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」が感染拡大・滞留するかでの人間と社会の“うごき”を新たな課題として設定した．

4） 新原道信・宮野勝・鳴子博子編著『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学出版部，2020年，1−151頁を参照されたい．序章は新原道信，第Ⅰ部　地球社会のジレンマに応答する“臨場・臨床の智”は新原道信，鈴木鉄忠，阪口毅が担当した．

歴史上体験したことのない速度での“パンデミック（語源的には，ギリシア語の pandemos，つまりは，すべての［pan］，民衆：［demos］が直面する事態）”は，惑星地球（the planet Earth）というひとつの「船」の内側で，短期間に局所的な出来事の影響が伝播してしまう惑星社会（planetary society）の特質とつながっている．「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」は，現にそこに居るにもかかわらず，“選択的盲目（現実から目をそらす性向）”により，実数・実態の把握を放棄してきた「移民・難民，外国人労働者との『壁』の問題」を顕在化させる．

スラム街や難民キャンプ，家庭内の虐待，解雇 —— “「壁」の増殖”と“パンデミック”は，“端／果て（punta estrema/finis mundi）”のみならず足元において，惑星地球規模となった社会の至るところで，偏差と隔絶をともないつつ，「恐怖と欠乏から免れ平和のうちに生存する権利」（憲法前文）から疎外された“受難者／受難民”を生み出す．

このような“うごき”を捉えようとするとき，「地球の裏側」へも足を伸ばすフィールドワークを可能としていた現代社会とそこでの調査研究者の在り方（ways of being）も問い直される．そのため，2020 年度の論稿においては，以下の“問いかけ（interrogazione, ask questions）”による考察を試みた：

> **フィールドに出られないとき，フィールドワークに何が出来るのか？“フィールドに出られないフィールドワーク（Fieldwork that cannot appear in the field, ricerca sul campo che non può apparire nel campo）”という経験は，人間と社会の“うごき”を捉える試みに何をもたらすのか？**

本稿においては，「フィールドに出られないフィールドワーク」という考察をさらに深化させ，人間と社会のうごきを捉えるための「フィールド（ワーク）」の再定義と再構成をめぐる考察を行いたい．本稿では以下の“問いかけ”を探求していく：

> **「グローバルなフィールドとその物理的な限界（the global field and its physical boundary）」[5]を持つ惑星社会，“「壁」の増殖”“パンデミック”といった「解決」困難な**

5）メルッチは，現代社会の特徴を以下のように述べている：

私たちは，グローバル社会となった惑星で生活している．それは，外部の環境および私たちの社会生活そのものに介入していく力によって，完全に相互に結合していく社会であるが，しかし依然として，そのような介入の手が届かない本来の生息地である惑星としての地球（the planet Earth）に拘束されているような社会でもある．社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界という，惑星としての地球の二重の関係は，私たちがそこで私的生活を営む“惑星社会（the planetary society）”を規定している．Melucci, Alberto, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996（＝新原道

問題に直面し続ける惑星社会において，探求すべき「フィールド」はいかなるものとなるのか.「フィールド」そのものを再定義・再構成し,組み直していくようなフィールドワークをいかにして探求するのか？

以下，第2章では,「3.11」以降すすめてきた“うごき”の場に居合わせるフィールドワークの試みをふりえり,第3章では,「新型コロナウイルス感染症（COVID-19)」のもとでのフィールドワークの再定義･再構成について，さらに第4章では,「3.11」以前からの難題･難問となっていた「人間の境界線の揺らぎ」への応答について考察する．第5章では，身体の監視･管理，操作・介入をめぐる問題，第6章では，国境線の移動などを体験してきた地域の問題をとりあげる．結びの第7章では，5章6章での試論（フィールドワークを再定義・再構成する“想像／創造力”の試み）をふまえて，本稿の問いへの応答を試みたい.

2．“うごき”の場に居合わせるフィールドワークの試み

本研究チームは,「歩く学問／フィールドワーク」の実践者で，しかも「正統なる嫡子や本流ではない」と自分を捉えているような人たちとの協業が出来ないかと考え,“うごきの比較学”に関する研究と併走するかたちで,『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』[6]という共著の準備をすすめてきた．同書の“基点／起点”となっていたのは，2012年度と2013年度の2年間にわたって中央大学で行った「プロジェクト科目：歩く学問／フィールドワークから学ぶ」だった.

「3.11」の後，とにかく何かしなければという,「いてもたってもいられない」気持ちから始めた試みである[7]．その場では，教室にいながらにして，生々しいフィールドの情景が浮かびあがってきた．地域に暮らす人々の“共存・共在の智”と，その“複合的な智（cumscientia, saggezza composita, composite wisdom)”を受けとめる“臨場・臨床の智（cumscientia ex

---

信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ―惑星社会における人間と意味』ハーベスト社，2008年，3頁).

6） 新原道信編『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』（ミネルヴァ書房，2022年）では，本研究チームの研究員である新原道信，首藤明和，阪口毅，鈴木鉄忠，友澤悠季，中村寛，大谷晃，栗原美紀，鈴木将平を中心として，メンバーを構成し，各自がこれまですすめてきたフィールドワークをふりかえり,「新型コロナウイルス感染症（COVID-19)」以降のフィールドワークの在り方（ways of being）についての問題提起を試みた.

7） このプロジェクトには，中村寛，鈴木鉄忠，友澤悠季，阪口毅に加えて，歴史学者・民俗学者の木村哲也氏，アメリカ「辺境」の研究者・鎌田遵氏，写真家の大西暢夫氏と亀山亮氏，ドキュメンタリー・カメラマンの百崎満晴氏,「スロー・ウォーター・カフェ」代表の藤岡亜美氏などが参集してくれた．来訪がかなわなかった中川雅子氏からは，ていねいなお手紙とご著書をいただいた.

klinikós, composite wisdom to facing and being with raw reality)”[8]のセッションであった．

たとえば，「基本的に過疎地めぐりをする」という百崎満晴氏は，『ムツばあさんの花物語』や『いつもと同じ春が行き』などの映像作品によって，自然とともに生きるひとたちの暮らしと，そこで育まれきた智慧を描き出すドキュメンタリー・カメラマンである．百崎氏は，「これまでお世話になった畑に申し訳ない．畑を山に帰す」という感覚を持つ「ムツばあさん」ご夫婦のもとに通い続けた．集落全員とお茶を飲み，「くう・ねる・あそぶ」をともにして，作業を手伝う．通うといっても，毎日ではないが，濃密な時間を過ごす．ひっかかったことをしらべ，言葉をかえしていくと，話がつながっていく．本当の意味での出会いは，どこからだったのかと言えないような出会いのなかで，ドキュメンタリーがつくられると語った[9]．

写真家の大西暢夫氏は，『水になった村』（情報センター出版局，2007 年）や『おばあちゃんは木になった』（ポプラ社，2002 年）などの作品で，ダムの底に沈みゆく徳山村の老人たちの自然とともにある暮らしとそこに息づく智慧とその生活を，あるいは『ぶたにく』（幻冬舎，2010 年）では，生きることと生かされること，私たちの「いのち」の在り方を描いてきた．「なぜ特定のひとだけがこうした『決断』をしなければならなかったのか」という“問いかけ”とともに，ダムに沈む村や精神病院に通い続けた．

大西氏は，「村を出る」という「決断」を余儀なくされ，町で「異国」暮らしをする人々に出会った．14 歳から 50 年以上も入院を続ける人がいる精神病院では，施設に特定の人間をおしこめて，すれちがうことがまったくない．だから，一人一人を撮影した写真集を出した（そこまでは本当に長い時間を必要とした）．東松島にも，聴ける状態ではないときに入ったが聴けなかった．一年経って「やっとできるかな」となり，スタジオをつくって話を聴いた．

話を聴いていくと話が重なってきて整理されていく．泣きながら遺体を探す自衛隊員，番号を付けられた遺体の写真と棺桶の側にいた警察官，夏場に死体を引き上げた役場の人たちのかたわらに居るしかなかった．娘を東松島の仮設住宅に連れていき，石巻市の大川小学校に通い，「私たちがつくってしまった時代をのこす」ことをただ続けていく．いつもそのひとたちを気にかけて暮らす」という“不断／普段の営み（movimenti continui e quotidiani）”について，大西氏は語ってくれた[10]．

亀山亮氏は，メキシコやパレスチナ，コンゴ，アンゴラ，リベリア，シエラレオネなどの戦

8）“臨場・臨床の智”については，新原道信編著『“臨場・臨床の智”の工房―国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部，2019 年，1–71 頁の序章を参照されたい．

9）百崎氏は，NHK 仙台で，たとえば，「花は咲いて 散るからこそ 海辺のまちのローズガーデン」（NHK BS プレミアム，2022 年 3 月 12 日放送）など，息の長い作品を創り続けている．

10）大西氏は，徳山村とかかわり続け，『ホハレ峠―ダムに沈んだ徳山村 百年の軌跡』彩流社，2020 年をまとめている．2017 年 3 月，ダム建設反対の住民運動を続ける長崎県川棚町の岩屋郷・川原地区を 30 年ぶりに再訪した折に，大西氏がこの地をごく最近訪れていたことを側聞した．

場に身をおいてきた．講義では，最新の写真集『AFRIKA WAR JOURNAL』（リトル・モア，2012 年）から，コンゴの写真を見せてくれた．講義の始まりから終わりまで，ずっとスリリングな展開でメモを取ることが出来なかった．写真集で見ていたはずの一枚一枚の写真がプロジェクターに映されると，あらためてそれぞれの人物の視線に射貫かれるような感覚を覚えた．目が釘づけとなり，息をのむ．そこには，「生身の人間」がいて，内なる「叫び」があり，まぎれもない「生」の手触りが映し出されている．「ぶらぶら歩くが夜は歩かない，臆病に，しかしやりたいときは迷わずやる」といった言葉には，智へのパトスと強靱な実践智が埋め込まれていることを，学生たちも感じ取っているようだった[11]．

ここで紹介した三氏に共通していたのは，第一に，ずっとその場に居られるわけではないが，通い続ける，あるいはそれがかなわないときでも，「終わったこと」にはせず，ひっかかり続ける —— いわば，地域に寄りそい，生身の「ひと」にこころを寄せるフィールドワークをしていたことであった．第二に，突然，日常がこわれる体験をした「ひと」の“痛み／傷み／悼み（patientiae, doloris ex societas）”にふれる“智”を“伝承・伝達”しようとしていた．

この三氏のみならず，このプロジェクトにかかわってくれた人たちに共通していたのは，異なるアプローチ，フィールド，メソドロジーを持ちつつも，それぞれのフィールドワーク（learning/unlearning in the field）によってつくられた“臨場・臨床の智”であった．筆者もまた，メルッチやメルレルたちとともに，“臨場・臨床の智” —— 物理的距離の如何にかかわらず，生身の現場に“居合わせる”ところの「エピステモロジー／メソドロジー」 —— を“探究／探求”してきた[12]．

ここから構想されたのは，ひとが移動し，様々な言語・文化・宗教・習俗などが衝突・混交・

11） 亀山氏は，中央大学の講義に八丈島から来てくださった．『AFRIKA WAR JOURNAL』は，土門拳賞を受賞した．八丈島から沖縄に通い，その後，『戦争・記憶』（青土社，2021 年）をまとめた．

12） 筆者は，もともと哲学で学問的トレーニングを受けており，最初からフィールドワークを学び体験を積んできたわけではない．世界を鳥瞰するテオリア（観相）の学としての「（狭義の）哲学（界）」から「野外」に“ぶれてはみ出す（deviando, abweichend）”という背景（roots and routes）をもち，「正統なフィールドワーカー」ではない．学問は，特定の状況，とりわけ最悪の状況においてのみ力を発揮する“臨床・臨場の智”であり，最悪の状況でもたたかうための武器としてのみ意味をもつものと考えていた．1986 年 4 月 26 日のチェルノブイリ原発の事故の翌年である 1987 年から 1989 年にかけて地中海の島サルデーニャに留学・滞在し，1987 年の国民投票でイタリアのすべての原発が廃止されるという“うごきの場（field of nascent moments/processes, campo di momenti/processi nascenti）”に居合わせた．その後も，1999 年 3 月のコソボ空爆（父親の危篤といっしょに空爆のニュースをイタリアで聞き），「9.11」後のアフガニスタン侵攻（メルッチの訃報の直後），2003 年 3 月米軍のイラク侵攻（ミラノから日本へと向かう飛行機のなかで第一報が入り，その後，サイードが亡くなった）といった“根本的瞬間（Grundmoment）”と，地中海・イタリアでの日常性の体験とを“織り合わせる（intrecciare insieme, weave together）”かたちで，地中海発の“フィールドの智（wisdom to facing and being with the field, saggezza per affrontare e stare con il campo）”を積み上げてきた．

混成・重合することで生み出された“移動民の子どもたち（figli di homines moventes）”がこころ起きなく自分の顔を出せる場（“願望のヨーロッパ”）を創るというものだった[13].

この構想からの「変奏曲」として，ベトナム軍がプノンペンを攻略しクメール・ルージュ体制を崩壊させた1979年に生まれ，メコン川を命がけでわたってタイのカオイダン難民キャンプにたどり着き，その後，世界各地に散らばっていった在日カンボジア人が，「息つぎ」をできる場所を創りたいと思い，『うごきの場に居合わせる』[14]の舞台となった「湘南プロジェクト」「聴け！プロジェクト」にひきこまれていった.

これがおそらく，“生身の現実”との“衝突・混交・混成・重合の歩み（percorso composito, composite route）”から生まれたフィールドワーク（を生きるというデイリーワーク）だった. このフィールドワークの在り方（being involved with the field, il gioco relazionale nel campo di azione）を，“うごきの場”に“居合わせる（being there by accident at the nascent moments in which critical events take place）”と名付けた.

3.「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」とフィールドワークの再定義・再構成

しかしながら，「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」の感染拡大に直面し，世界各地の“境界領域”に赴き，「顔をつきあわせる」「寝食をともにする」といった身体的な感覚の共有をともなうフィールドワークは困難をきわめた. 地球規模に感染症が拡散・常住する状況・条件下では，事に臨む／病の床に寄り添う／場に居合わせることそのものが，著しく制限されることとなった. この“状況と条件（situazione e condizione）”は，一時的なものとはならず，むしろ「新型コロナウイルス感染症」を契機として，「あたりまえ」のように飛行機で移動す

13）前述のヨーロッパ研究ネットワークを母体として探求してきたヨーロッパ“願望のヨーロッパ”については，下記の論稿を参照されたい：

・新原道信「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ―差異と混沌を生命とする対位法の“智”」廣田功・永岑三千輝編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社，2004年，303−351頁.

・新原道信「深層のアウトノミア―オーランド・アイデンティティと島の自治・自立」古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部，2006年，397−430頁.

・新原道信「境界領域のヨーロッパを考える―移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究を通じて」『横浜市立大学論叢 人文科学系列』60巻3号，2009年，137−167頁.

・新原道信「願望のヨーロッパ・再考―「壁」の増殖に対峙する“共存・共在の智”にむけての探求型フィールドワーク」『横浜市立大学論叢 社会科学系列』71巻2号，2020年，145−166頁.

・新原道信「移動民の側から世界を見る―「周辺」としていた土地や人を理解するためのフィールドワーク」中坂恵美子･池田賢市編『人の移動とエスニシティ』明石書店，2021年，33−50頁.

14）“移動民の子供たち”が「ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」（メルッチ）として“願望の神奈川”を構想した「湘南プロジェクト」「聴け！プロジェクト」については，新原道信編『うごきの場に居合わせる―公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部，2016年を参照されたい.

ることの意味が問い直されることになる．この点については，前述の『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』の序章において，COVID-19 以降のフィールドワークについて，最初の考察に着手した[15]．ここでの“問いかけ”は以下のようなものとなる：

・二酸化炭素（CO_2）を大量に排出するジェット旅客機で世界各地を移動することは，有限な地球環境に悪影響を与えることとなってしまわないか．
・自分とは異なる条件で懸命に生きるひとたちの生活に悪影響を与えないか．
・自由に移動できる人間が，簡単には移動できないひとたち，自分の意志とは関係なく移動を余儀なくされたひとたちに会いに行くとはどういうことか．
・フィールドワーカーの移動と環境難民や政治難民の移動とのちがいをどう考えるのか．

すなわちこれは，これまで十分には自覚的に意識されていなかったフィールドワークの境界線をどこに置くのか（where to put our boundaries of fieldwork）という“問いかけ”である（本稿冒頭のメルッチの言葉を参照されたい）．

“うごきの場に居合わせる（being involved with the field, il gioco relazionale nel campo di azione）”ようなフィールドワークは，メルッチの言葉のように，「人間の体験の限界，そして自由」のなかで再定義・再構成されざるを得ない．「自らを破壊できる力を備え，何ら保証もない選択に個人の生活が依存しているような時代において，どこに私たちの境界線を置くのか」という想像力が，フィールドワークの現在的な課題となっているのである．

惑星社会は，きわめて“複合・重合”的な，ひとつのまとまりをもった有機体として形成されており，しかしそれゆえに，自分が属している小さな場（いまここで）から始める可能性を秘めている．惑星社会で生じる諸問題は，個々の問題の複雑さや微細さとともに，かたちを変えつつうごいていく（changing form）という様態を持って立ち現れる．そのため，問題に応答する側もまた，その“うごき”を自らの“うごき”のなかで捉え，応答することが求められる．

フィールドワークは，なかなか実感のわかない惑星社会の“うごき”を“感知し（percieving/sensing/becoming aware）”“感応する（responding/sympathizing/resonating）”ための“創造的プロセス（the creative process, il processo creativo）”である[16]．「いま私たちが生きる社会はど

15） 以下，本章で展開するフィールドワークについての考察は，新原道信編『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』（ミネルヴァ書房，2022 年）の「序章」（とりわけ 8–10，25–30 頁）での考察を要約したものとなっている．

16） メルッチは，下記のように述べている：

こんにち必要なのは，問題のなかに予め答えが含まれているような問題解決だけではなく，新たな問いを立てることに私たちの創造的な力を向けることであるということが，ますます明らかになってきている．もし創造性と問題解決とを同一視してしまうと，創造的活動は，必ずし

こに来てしまっているのか？」―― この“問いかけ”は，すべてがローカルな運命共同体，逃げていく場所のない領域（テリトリー）となった惑星地球，「グローバルなフィールドとその物理的な限界（the global field and its physical boundary）」を持つ“惑星社会（planetary society）”を生きる人間であることを身体感覚も含めて理解し，うごき出す手助けをしてくれる．

“惑星社会のフィールドワーク”は，物理的であれ想念のなかであれ，土地とひととの間での新たな関係性を創出していくものである．物理的な移動や人との接触が制限されている状況・条件下でも，人間と社会のうごきを察知し，気配を感じ取り，“うごきのなかで書くこと（writing in the field while being there by accident at the nascent moments）”は出来る．

ひとつの“地域社会／地域／地（regions and communities/territory/earth, regioni e comunità/territorio/terra）”となった惑星社会は，きわめて小さなコミュニティであれ，個々人の身体の内側にある“内なる惑星（inner planet）”であれ，そこから“［何かを］始める（beginning to）”ことが出来る．探求の「フィールド」とそこでの営み（「ワーク」）の境界線を意識し再定義・再構成しようとすることが，私たちが持つ限界を受け容れる自由（free acceptance of our limits）へとつながっていく．

だとするなら，“惑星社会のフィールドワーク”は，デイリーワークのなかで出会った書物，映画，ドラマ，ドキュメンタリー，手記，私信，日誌，風景，情景，音，匂い，話の断片，表情，つぶやき，くちごもり，記憶の奥底 ―― そのどれもが「フィールド」であり，それら生きた「タペストリー（織物）」を織り合わせていくフィールドワーク／デイリーワークとして再定義・再構成が可能である．こうしていま，ここでなすべきフィールドワークにとっての根本的学術的な“問いかけ（interrogazione, ask questions）”は，以下のものとなる：

惑星地球をひとつの海として，社会をそのなかに浮かぶ島々として体感するような“智”
―― 地球規模の複合的諸問題に応答する“臨場・臨床の智”を，いかにして紡ぎ出すのか．

も所与の問題に対する解答を導くものではなく，むしろそれは提示された問いのレベルにおけるフィールドを常に再構築することを要求するのだ，という事実を見落としてしまうだろう．芸術のように，問題を解決するわけではない創造的活動が存在するし，またある一定の枠内に制約された創造的とはいえない問題の解決だって存在する．私たちの社会は，創造的プロセスを促す個人の資源を発展させていくという試みに直面している．すなわちそれは，リスクを受け容れ，規定できないものを甘受し，既に知られ，分類され，決定されていたかに見えるものを，一時保留にすることを厭わないような能力である．それはまた私たちの心を開き，新たな領域を切り拓くために，自分自身の抑制や不安定さを乗りこえていく能力である．それゆえ創造力とは，それがいかに定義されようとも，驚嘆するという私たちの能力にかかっているのだ．

Melucci, Alberto, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996（＝新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ―惑星社会における人間と意味』ハーベスト社，2008 年，196 頁）．

地球の，他の生き物の，他の人間の悲鳴を，感知し，感応する“共存・共在の智”をいかにして可能とするのか．“惑星社会のフィールドワーク”はこの課題を引き受け／応答するものたり得るのか．そのためにはいかなる条件があるのか？

4．「人間の境界線の揺らぎ」――人間と社会の再定義・再構成

ここまで，“「壁」の増殖”と地球規模の“パンデミック”である「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」拡大によって，フィールドワークが直面した再定義・再構成の必要性について述べてきた．しかしこの，フィールドへの“問いかけ”の背後には，人間と社会に向けてのさらなる根本的な“問いかけ”が存在している．

「3.11 以降」の共同研究の成果である『“境界領域”のフィールドワーク ―― 惑星社会の諸問題に応答するために』（新原道信編，中央大学出版部，2014 年）では，「人間の境界線の揺らぎ」という問題意識を持っていた：

> 核エネルギーや各種の化合物の「発明」は，私たちの“生存の在り方”を問い，遺伝子操作・産み分け・クローンなどによって「人間」の境界線は揺らいでいる．もはや，「物理的限界」を無視した「対処」法 ―― 廃棄物処理場が満杯になったからといって新たな候補地を探したり，化石燃料の蕩尽と CO_2 の排出による「地球温暖化」に対する「原子力発電」，さらにはオイルシェールやメタンハイドレートといった新たな地下資源を採掘したりといったやり方 ―― では，未来への不安を消すことは出来なくなってきた．
> 私たちが直面しているのは，きわめてリフレクシヴ（再帰的／内省的／照射的）な現象であり，資本や市場や情報そのものの運動，あるいは生物多様性や物質循環の運動によって深く拘束されている．それゆえ，“衝突・混交・混成・重合”によって生み出されつづけている現代社会そのものが持つリフレクシビティと，個々人の没思考性，没精神性が対位的に存在しているという「状況・条件」のもとで，個々人がいかなる形でリフレクションをおこない意味を産出するのかという形で問題が立てられている[17]．

本稿冒頭のメルッチの言葉に即して言うなら，「今日では，私たちの境界線をどこに置くかは，意識的なことがらとな」ったのであり，そこでの「限界を受け容れる自由（free acceptance of our limits）」の再定義・再構成が必要となっている．これに加えて，潜在的な“未発の瓦礫（rovine nascenti, nascent ruins）”が顕在化してしまったという問題がある．

17） 新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部，2014 年の序章「“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”を考える」のとりわけ 3-6 頁を参照されたい．

2007 年に刊行した『境界領域への旅』の根本的な問題意識は，“未発の瓦礫”を察知することにあった．同書では，学問の使命は，雷雨のように降り注ぐ「情報」のなかから，「いま起こっている」ことの深層にある“コト（ことがら，事物の間柄／関係と理（ことわり），文脈・水脈）”の多重／多層／多面性，複合・重合性を丹念に描き出し，瓦礫のなかの“未発の毛細管現象／胎動／交感／社会運動（movimenti nascenti）”，“カタストロフ（異変）とメタモルフォーゼ（変身・変異 change form）”の道行き（移行，移動，横断，航海，推移，変転，変化，移ろい）の総体把握（穴はあっても大きくつかむこと）を試みることだと書いた[18]．

ところが「3.11 以降」，“崩壊，破滅へと至る瓦礫”や“時代の裂け目”は，目に見えるものとなってしまい，「予見」しつつ，十分に責務を果たせなかったという罪責感があった．「3.11」に先立つ「9.11」の翌日，白血病を患っていたメルッチが夭逝し，喪失の“痛み／傷み／悼み”のなかで[19]，第二次世界大戦の瓦礫のなかから再出発し，かろうじて砂上につくられてきた「戦後世界」の命脈が絶たれるという“終わりの予感（doomed premonition, premonizione dell’apocalisse）”が生起した．いわば“傷つきやすさ（vulnerability）”がもたらす“命運への doomed な（ただ幸せ，安心とはいえない）予感”である．

ここでの“予感”とは，はっきりとした“知覚（percezioni, Wahrnehmungen）”により“予見［的認識を］する（prevedere）”とはいかないまでも，やって来る“事件（avvenimenti, events）”の“兆し・兆候（segni, signs）”を“うっすらと感じる／予感する（ahnen）”という感覚である．十分な「自覚」や「意識」ではないが，“心身／身心現象（fenomeno dell’oscurità antropologica）”として，微細な“うごき”を体感しているという状態である[20]．

現在の立ち位置から，過去の“未発”の局面をもう一度見直していくと，実はすでに「そこに在った」ものを“サルベージ（沈没，転覆，座礁した船の引き揚げ，salvage, salvataggio）”す

18）新原道信『境界領域への旅―岬からの社会学的探求』大月書店，2007 年の「過去と未来の“瓦礫”の間で」，とりわけ 159–179 頁を参照されたい．

19）近しい人たちに，2001 年 9 月 13 日，下記の訃報を送った：

Sent: Thursday, September 13, 2001 5:22 PM
To: 新原道信の知己の方たちへ
Subject: 訃報です．
みなさまへ　戦争状態の中にあることを心配しております．昨日，Alberto MELUCCI が亡くなりました．
偉大な“智（cumscientia）”がこの地上から失われました．みなさまのご無事をただ祈ります．
新原道信拝

20）“予見［的認識を］する（prevedere, prevision）”ことと“（うっすらとした）予感（presentiment, presentimenti, Vorahnungen）”については，新原道信「“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるために―3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（2）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 25 号（通巻 258 号）2015 年 3 月，43–68 頁を参照されたい．

ることが出来るかもしれない．さらには，ある特定の条件，“根本的瞬間（Grundmoment）”においては，過去と未来という非在の間の全体である「直接的な現在」のなかで，生まれつつある，生起しつつある“うごき”を捉えることも出来るのではないか．

以下では，“「壁」の増殖”と“パンデミック”による“受難者／受難民”の生存の危機のなかで，すでに在った“終わりの予感”をたぐり寄せてみることにしたい．これ自体が，〈フィールドそのものを組み直し，再定義・再構成していくフィールドワーク〉の試みである．

この再定義・再構成の試みは，まず5章で，メルッチの惑星社会と身体に関する見方（visione）――身体が，監視・管理・操作と個々人の深い欲求とが衝突・混交する「闘技場（arena）」となっている状況とそこでの“予感（doomed premonition, premonizione dell'apocalisse）”――について，見ていく．

5．「闘技場」としての身体をめぐる“予感”

メルッチは，白血病で闘病中の2000年5月に来日し，「身体が今日の社会紛争，社会運動，意味の産出にとって，もっとも重要な闘技場（arena）」であり，「人間という種そのものが直面する生体的関係的カタストロフ（la catastrofe biologica e relazionale della specie umana）」こそが，惑星社会の“根本問題（fundamental problem, problema fondamentale）”であるという話をした[21]．

メルッチから発せられた言葉（変成していく身体の奥底からの声）とのかかわりで想起される小説として，30代半ばに悪性腫瘍で早逝したSF作家・伊藤計劃の小説『ハーモニー』（早川書房，2008年）がある．この作品には，地球規模にネットワーク化・システム化し，身体もまた監視や統制，開発の対象となった社会における“生存の在り方（ways of being）”への根本的な“問いかけ（interrogazione, ask questions）”が埋め込まれている．

この小説では，未知のウイルスの感染拡大と戦争が勃発し，地球規模での「大災禍（ザ・メイルストロム）」を体験した近未来の社会が舞台となっている．破局と混沌の危機に対処するため，新たな政治体制である「生府」のもとで，個々人の身体が監視・管理される．そこでは，

21） Melucci, Alberto, “Sociology of Listening, Listening to Sociology”, 2000（＝新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域―自己決定・協働，その主体　地域社会学会年報13』ハーベスト社，2001年，1-14頁）と，Melucci, Alberto, “Homines patientes. Sociological Explorations（Homines patientes. Esplorazione sociologica）”, presso l'Università Hitotsubashi di Tokyo（＝新原道信「A．メルッチの“境界領域の社会学”―2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学20号（通巻233号），2010年，54-61頁）を参照されたい．「晩期」のメルッチの身体をめぐる考察については，新原道信「生という不治の病を生きるひと・聴くことの社会学・未発の社会運動―A・メルッチの未発の社会理論」東北社会学研究会『社会学研究』第76号，2004年，99-133頁を参照されたい．

「健康・健全」であることが公共の義務とされ，すべての人間が「生府」のデータベースにつながれる．個々人の身体には，健康維持のための装置を埋め込まれ，私的な体験，各自の皮膚感覚や身体感覚までもが記録され，ビッグデータに集約されていく．

ここでは，「生命権の保全」の名の下に，軍事・警察も含めた複合システムによって機能する監視・管理社会が描き出される．作品の冒頭では，アフリカ・ニジェールの砂漠の民から，「あなたがたは自分たちの神への信仰を押しつける」という言葉が投げかけられる．その後すぐに登場する無人の攻撃機は，2021 年のアフガニスタンで現実に使用されており，女性や子どもが亡くなっている．

身体の細部にまで監視・管理の網がはりめぐらされた「健康で幸福な社会」に違和感をもつ主人公にもっとも影響を与えた友人は，少女時代，チェチェンの紛争地帯でロシア軍による性的暴行によって深い傷を負った「難民」の一人だった．その「難民の少女」は，日本の里親にひきとられた後，今度は，人間の意志を制御して社会システムを安定化させる研究の「実験台」とされていたことが，後になってわかる．

社会は「実験」を主導した科学者の想定をこえて，過剰に「健康な」社会へと突き進んでいった．ところが，この「安定」した社会で，自殺が多発し，脳内に構築されたシステムに介入した謎の集団から，「他者などどうでもいいという感情を解放せよ，他者を殺せ」というメッセージが発せられる．他者を殺すか，それとも自分を殺すかというジレンマのなかで，人々は自殺へと向かわされる．人間を「野蛮」から救うための地球規模の身体管理システムと生身の身体との間の不協和（dissonance）が顕在化する．

核，テロ，暴動，感染爆発，監視・管理，分断，強権，相克，衝突，介入・操作，身心の病 —— この小説では，グローバル社会が直面する地球規模の諸問題（global issues）の束が，眼前に，そして身体の内奥を突き刺すかたちで描き出される．伊藤計劃が“描き遺し”たのは，人間と社会が直面する〈関係性〉の危機である．すなわち，①〈都市と地域の関係性〉の危機，②〈ひととひとの関係性〉の危機，③〈惑星地球と社会システムとの関係性〉の危機，④〈社会システムと個々人の身体との関係性〉の危機である[22]．

生存の在り方をめぐる「問い」という点では，映像作品からの“問いかけ”に接することもできる．フランスで 2006 年に制作された「シリーズ未来予測　ES 細胞（The Cell）」（NHK の BS1 で 2009 年 7 月 24 日に放送）では，20 年後の未来である 2026 年の世界 —— バイオテクノロジーの進化とその成果を享受する「既得権益を持つ高齢者」と「若者」や「貧者」との徹

22）新原道信「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに—3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（1）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 24 号（通巻 253 号），2014 年，41–66 頁において，平和研究者 J. ガルトゥング（Johan Galtung）の議論に即して，この問題を考察している．

底した隔絶が描かれている．受精後の胚盤から分離される多能性幹細胞であるES細胞（embryonic stem cells），さらには，遺伝子工学によって人工的に造られる多能性細胞であるIPS細胞（induced pluripotent stem cells）は，他の細胞に変化可能な体性幹細胞であり，この細胞から各種の臓器を造形することが可能となる．こうした多能性細胞の確保のために，流産や中絶した胎児や受精卵が使われるという倫理的な問題も生じるが,「治療」への期待は大きい．ES細胞によって造り出された心臓が鼓動するのは，もはやSF小説の話ではないという．

しかし,「無」から何かを創り出せるわけではない．新たな技術開発には，被験者（実験台）が必要となる．他者の身体の一部を犠牲にする構造から逃れられない．ここには,「先進社会」と「周辺地域」（受精卵の供給先である都市と供給元の地域との間での）〈都市と地域の関係性の危機〉，医療の企業化による高度医療の選択的な享受という〈ひととひとの関係性〉の危機の問題が横たわる．

あるいは，2011年に国際共同制作された「ナノレボリューション 病が消える日（Nano Revolution World without Desease）」（NHKのBS1で2012年2月29日に放送）では，人間の身体を細胞レベルでコントロール可能となっていることが描かれている．ここでは，治らない病気が治る可能性が拡大している．たとえば，がん細胞を効率的に攻撃するため,「設計図があれば簡単に出来る安全な人工ワクチンの製造」が企図される．バイオナノテクノロジーによって身体の組織を再生し，人間の能力を拡張していく．医学と工学の一体化によるサイボーグのような「新しい人々」を生み出す可能性が語られる．

この映像のなかでは，研究者の予測に基づく近未来のナノシティが描き出される．この都市の住民は，公衆衛生上の規則として，伊藤計劃の『ハーモニー』に登場した「WatchMe」（個々人の身体の状況を監視し，健康管理システムと個々人の身体を同期させるナノレベルの装置）のようなマイクロチップの装着が義務付けられている．身体に直接マイクロチップを埋め込む近未来社会では，チップを埋め込んでいない人間は極度にシステムから疎外されていく．

これらの映像に登場するメカニズムは，現在の「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」への対処法のなかでも活用されており，病気のデータを収集するシステムは，医療のみならず，空港や工場，多くの現場で使われている．

「健全な生命主義の社会」と「ハーモニープログラム」の強権発動 —— 伊藤計劃が描いたシステムと生身の身体の〈関係性〉の危機は，メルッチが洞察していた“生体的関係的カタストロフ（biological and relational catastrophe of human species）”，そして「惑星社会のジレンマ」[23)]

23） 惑星社会のジレンマについては，新原道信・宮野勝・鳴子博子編著『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学出版部，2020年の序章，とりわけ7–9頁で論じている．メルッチは「答えなき問い」というかたちで，複雑性のジレンマ（dilemmas of complexity）による不確実性の増大とDecision-makingによる問題の隠蔽と先送りを捉える．そのうえで，以下のようなかたちでジレンマ

と相似形をなす．伊藤計劃とメルッチ，それぞれの知覚と洞察は，悪性腫瘍という現代的病を生きる生身の身体（corporeality）から発せられた“限界状況の生体的関係的想像／創造力（Biotic, relational imagination and creativity under limit situation）”である[24]．

いま私たちが直面している「問題」は，人類の滅亡あるいは「文明」社会の崩壊という〈惑星地球と社会システムとの関係性〉の危機から，管理社会の中での“人間の内面崩壊／亀裂”という〈社会システムと個々人の身体との関係性〉の危機にかかわる問題まで深化している．

身体をめぐる問題として現れる「現代病」「殺人事件」「自殺・心身症の増加」などは，ある日突然，特定の個人の「問題」として現れるように見え，個々人の内奥にかかわることから当事者以外には分かりにくい性質を持っている．技術革新と高生産性の追求による「成長」「発展」は，たとえば原子力，金融工学，バイオ，ナノ，IT，神経科学など「複雑性の超高度化したテクノロジー」によって「宇宙の力を人間が統治する」という「夢」と結びついていた．手近なところにある資源は惑星地球規模で枯渇していったとしても，「内なる惑星」である身体は，新たな「原野」「フロンティア」「外部」「征服の地」として残されている．ここでは，科学技術は，モノに向けられるだけなく，ココロやコトバ，人間の心身／身心へと向けられていく．

科学技術という「武器」を持った社会システムは，個々の人間の意志や意図をこえ，それ自

を整理し，想定内の「問題解決」ではない“新たな問いを立てる（formulating new questions）”ためには，自由の概念の再定義―所有することの自由（freedom to *have*）から存在することの自由（freedom to *be*）へ―が必要であり，生と死，健康と病，生物学的およびセクシャルな自然に介入する新しい権力（生権力）に対して，差異への権利（right to *difference*）を創成していく必要について考察している：

◇自律性（autonomy）と管理（control）との間のジレンマ
ex. 監視・管理と生活の自由

◇責任／応答力（responsibility）と全能（omnipotence）との間のジレンマ
ex. 環境やシステム，身体やプライバシーへの介入と制約

◇知識の不可逆性（irreversibility of knowledge）と選択の可逆性（reversibility of choices）のジレンマ
ex. 地球環境や病への介入の公共倫理（public ethic）

◇世界システムへの「内部化」にともなう包摂（inclusion）と排除（exclusion）のジレンマ
ex. 文化の均一化と社会文化的マイノリティの圧殺

Melucci, Alberto, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996（＝新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ―惑星社会における人間と意味』ハーベスト社，2008年，173-176頁）．

24）〈関係性〉の危機の当事者となった身体から発せられる洞察については，新原道信「THE BODY SILENT― 身体の奥の眼から社会を見る」『現代思想』vol. 26-2，1998年，243-257頁，および，Niihara, Michinobu, “Il corpo silenzioso: Vedere il mondo dall'interiorità del corpo” in Luisa Leonini（a cura di）, *Identità e movimenti sociali in una società planetaria. In ricordo di Alberto Melucci*, Milano: Guerini, 2003，207-219頁で論じている．

体の力で独自の方向性や法則性を持って機動・機能していくようになり，そこに生きる私たちは，社会システムを構成する「端末（ターミナル）」の「点」となる一方で，身心そのものへの操作・介入により「人間」の定義と境界線は揺らいでいく．

受精卵はすでに人間なのか．人間の境界線はどこか．クローン技術により患者本人の細胞核を受精卵に注入しES細胞を作り拒絶反応のない臓器を手に入れることの意味は何か．いままで治療できなかった病を治療できるのはよいことか．病も苦しみもない世界の苦しみは何か――私たちは，いま人間存在の根本をめぐる「答えなき問い」にさらされている．

続いて，6章では，メルレルの“社会文化的な島嶼性論”[25]を念頭におきつつ，惑星社会の諸問題の結節点となっているような境界地域の問題を見ていくこととしたい．

6．ヨーロッパの“境界領域”からの“予感”

メルレルは，固有性をもった個々人・集団が衝突・混交・混成・重合する“うごきの場”を“社会文化的な島々”として捉えた．メルレルの見方（visione）によれば，国家の中心から見て“端／果て（punta estrema/finis mundi）”とされた地中海の島々や，度重なる国境線の移動を体験してきた境界地域は，境界（[con] fine）と境界（[con] fine）をつなぐもの（cum）という意味で，“境界領域（cum-finis, con i liliti, with limits）”である．

境界地域（borderland, territorio limitrofo）は，多方向の境界の果て（frontier）に対して開かれ，“多系／多茎の可能性（the possible routes to the various alternative systems）”を潜在的に持っている．しかしその一方で，こうした地域においては，帝国や国家の利害の衝突により，その日常や生存を脅かされ，幾重もの“線引き（invention of boundary）”，境界線の移動による“異郷化（spaesamento, dépaysement）”を体験してきた．

そのため，“境界領域の社会文化的な島々を生きるひと（gens insularis in cumfinis）”は，人間と社会の大きな“うごき”のなかで生きるための“境界領域の智（cumscientia in cumfinis, composite wisdom of frontier/liminal territories）”を蓄えてきた．

ここでの“境界領域（frontier/liminal territories, zona di confine/territorio limitrofo）”とは，“多重／多層／多面”の“線引き（invention of boundary）”が衝突・混交・混成・重合するローカルなテリトリーである[26]．チェルノブイリ原発が位置するベラルーシとウクライナの境界地域

25）“社会文化的な島嶼性論（visione di insularità socio-culturale）”については，新原道信「A．メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み―“境界領域の智”への社会学的探求（1）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学27号（通巻268号）2017年および新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部，2014年の「序章」20-27頁を参照されたい．

26）新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部，2014年の「はじめに」ii頁および「序章」38-41頁で論じている．

は，ヨーロッパの“境界領域”の一つだった．

ベラルーシとの（国）境に近く，ウクライナの北部に位置する都市プリピャチは，1970 年に，チェルノブイリ原子力発電所研究建設にともなって計画的に建設され，「原発とともに繁栄するべき都市」だった．「原発で働く優秀な科学技術者とその家族」が暮らし，娯楽施設が完備され，文化活動も盛んで，子どもたちには高い教育が授けられていた．1986 年 4 月 26 日も，人々は，週末を楽しんでいた．突然の事故による「暫定的避難」は，二度と街にもどれぬ避難生活の始まりだった．

帝国の崩壊や国境線の移動を何度も体験してきたこの地の民にとって，1991 年のソビエト連邦の崩壊は，人間の営みのなかで繰り返されてきた既知の出来事の一つであった．これまでの受難と同じく“境界領域の智”によって，なんとかやり過ごし，生き抜くことも出来るはずだった．

しかしながら，チェルノブイリの原発事故は，まったくの未知の出来事，“異境（statius in cumfinis, stato ‘di confine’, different boundary states）”であった．突然の“異郷化（spaesamento, dépaysement）”により，先祖伝来の土地は，“異界（un altro mondo/pianet, another world / planet）”と化した．

原発事故の影響は，ベラルーシ，ウクライナ，隣接するポーランドや東欧諸国のみならず，スカンディナヴィアの遊牧民サーミの人々や地中海の島サルデーニャやコルシカの羊飼い[27]，さらにはヨーロッパ全体で人間や動植物の内なる“異物（corpi estranei, foreign bodies）”として循環し続けた[28]．

「ロシア 小さき人々の記録」（NHK スペシャルとして 2000 年 11 月 4 日に放送）は，国境，境界線の移動に翻弄された人々の“固有の生の軌跡（roots and route of the inner planet）”を記録するスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ（Svetlana Alexievich）の仕事に焦点をあてた作品だった．作品の主要な「舞台」となったベラルーシ（旧ソビエト連邦の「辺境」に位置し，ポーランド，ウクライナなどと国境を接する土地）の人々は，第二次大戦中の独ソ戦におけるブレスト要塞での戦闘（1941 年），アフガニスタン侵攻（1979–1989 年），チェルノブイリ原発事故（1986 年），チェチェン紛争（1994–1996 年，1999–2009 年）などの歴史的事件によって，何度も何度も繰り返し，大きな犠牲を払ってきた．

アレクシエーヴィチがとりあげた「こころのなか」の変動は，具体的な土地，“境界領域”

27）1994 年 12 月にスウェーデン・イェムトランド（Jämtland）のサーミの村を訪問して，チェルノブイリの影響について聴いている．「チェルノブイリ」以降のサルデーニャ・コルシカにおける羊飼いの受難については，新原道信「“境界領域”のフィールドワーク―サルデーニャからコルシカへ」『中央大学社会科学研究所年報』15 号，2011 年，1–24 頁で論じている．

28）循環する“異物”，“異物”と“異質なる身体”の循環については，新原道信『境界領域への旅―岬からの社会学的探求』大月書店，2007 年，111–115 頁で論じている．

の記憶と分かちがたく結びついている.「都市ではなく辺境に歴史の素顔がある」と語るアレクシエーヴィチは,“端／果て”から“生身の現実”に迫っていく.

ベラルーシでは,戦争とチェルノブイリが,この土地の歴史を語る話のすべてとなる.映像のなかでは,焼き討ちと虐殺で絶滅させられた村,子どもたちが兵士の死体をソリにして遊び,父親だと勘違いしてドイツ兵に近寄っていき殺されたといった話が続けざまに登場する.アフガン紛争では,多くのベラルーシの若者たちが命を奪われた.足や手のない若者たちは,アフガンでの殺戮による身心の後遺症とともに生き,子どもを膝に抱いて泣く元兵士たちの死は,「交通事故」や「食中毒」による死とされていく.

原発事故の直後,まっさきに駆けつけた消防士も,医師として治療に奮闘したアレクシエーヴィチの妹も放射能症で死んだ.見た目は同じである大地が,うち捨てられた「(立入禁止の危険な)ゾーン」とされ,まったくの“異界”となっている.「小鳥がさえずり,花が咲く土地のままじゃないか」と老婆は言う.しかし,鳥や虫たちの寿命は三分の一以下となっている.立ち入り禁止となった「ゾーン」への「帰還」は,年に一度だけ許される.電気も水道もない「廃村」に暮らす老人は,「私はどこにもいかない.故郷で暮らし,ここで死を迎えたい」という.連邦崩壊という歴史的には「通常」の出来事と,「まったく新しい」出来事が切り結び,同時に在る.チェルノブイリの人々は,「私たちは,実験場に暮らす実験動物だ」と,自分たちのことを理解し語る[29].

この「新しい事態」を表す言葉はあるのか.こうした“受難者／受難民(homines patientes)”たちは,「居ながらの出郷,心情の出郷」(石牟礼道子)を共通の要素としている:

> 意識の故郷であれ,実在の故郷であれ,今日この国の棄民政策の刻印を受けて潜在スクラップ化している部分を持たない都市,農漁村があるであろうか.……**心情の出郷**を遂げざるを得なかった者たちにとって,故郷とはもはやあの,出奔した切ない未来である.地方を出てゆく者と**居ながらにして出郷を遂げざるを得ない者**との等距離に身を置きあうことができればわたくしたちは故郷を再び媒介にして,民衆の心情とともに,おぼろげな抽象世界である未来を共有できそうにおもう[30].

---

29) チェルノブイリの“限界状況(Grenzsituation, situazioni-limite, limit-situation)”については,下記の著作などから示唆を受けている:

・Petryna, Adriana, *Life exposed: biological citizens after Chernobyl*, Princeton: Princeton University Press, 2013(=森本麻衣子・若松文貴訳『曝された生―チェルノブイリ後の生物学的市民』人文書院,2016年).

・Alexievich, Svetlana, Chernobyl prayer: a chronicle of the future, London: Penguin, 1997(=松本妙子訳『チェルノブイリの祈り―未来の物語』岩波書店,2011[1998]年).

30) 石牟礼道子『新装版 苦海浄土―わが水俣病』講談社,2004[1969]年,359-360頁.

汚染された原子炉は，鉄板とコンクリートで塞がれているだけで，いまだ冷却のプロセスが続いている．子どもたちは「数値」とともに生きる．干し草から牛乳，そして子どもたちの体内に“異物（corpi estranei, foreign bodies）”は蓄積していく．農家の下働きをして，飼育している牛の乳を子どもたちに飲ませるしかない．

これまで人間が体験したことがない理解の不可能性の深淵をのぞき込んだまま生きる子どもたちの“心意／深意／真意”をどう想像したらよいのか．子どもたちは，病気を抱え，同じアパートに住む人々がどんどん死んでいく．国家も民族も宗教も人種もなく，ただの「生物（実験動物）」となった「チェルノブイリ人」――この“限界状況（Grenzsituation, situazioni-limite, limit-situation）”から逃れることは出来ない．「チェルノブイリ」は，「3.11」として再来し，いま私たちは，常にこうした“限界状況”が特異点でなく，「かつてない状況」が次々と起こる日常――“見知らぬ明日（unfathomed future, domani sconosciuto）”を生きざるを得ない．

チェルノブイリは，「昔，遠くで起きた事件」とはなっていない．これは過去ではなく，現在進行形の「未来の物語」だ．そのことを少しでも想像するためには，有刺鉄線のなかで暮らす老婆の顔の皺や，放射能の影響で早世してしまうツバメたちを想像することが大切となる．「チェルノブイリ」と「Fukushima」を比較する人はいるだろう．ここでは，人類が直面したことがなかった長期の被爆体験という事態のみならず，組織化された社会を生きる組織人の問題という近代社会の問題が，地域社会の現実に深く食い込んでいることを比較する必要がある．

生物としての生身の人間が，いかなる知性にとっても対応困難な現実に直面している．その一方で，人間の組織化／組織化された人間がつくる社会の最先端にある組織はそのままに在り続ける．組織化・システム化・端末化した人間もまた，身体が悲鳴をあげている．“多重／多層／多面”の〈関係性〉の危機に直面した生身の身体から発せられた声はどう聴きとどけられるのか．どのように自らの身体の声に気付くのか．対峙すべき巨大な力とは何か．

7．おわりに――“多系／多茎”のフィールドの想像／創造にむけて

ここまで，デイリーワークのなかで出会った書物，映画，ドラマ，ドキュメンタリーなどを「フィールド」として，フィールドワークの再定義・再構成の試みをしてきた．

これもまた“フィールドに出られないフィールドワーク”の試みの一つであり，“うごきの比較学”による“惑星社会のフィールドワーク（Exploring Fieldwork in the Planetary Society）”の一部を構成する．以下では，本稿の結びとして，ここまでの考察と，以前に行ったフィールドワークの経験の“サルベージ（渉猟し，踏破し，掘り起こし，掬い／救いとる）”を“織り合わせる（intrecciare insieme, weave together）”ことを試み，次なる課題にむけての橋渡しをしたい．

以下，本稿の問いである〈**「フィールド」そのものを再定義・再構成し，組み直していくようなフィールドワークをいかにして探求するのか？**〉に対して，3 つの応答を試みる．

7-1. 境界線を引き直す異境の力

本稿の課題は，潜在的な“未発の瓦礫”が顕在化している時代状況 ―― 「問題解決」という枠組みで対処した場合にまた新たな問題を惹起してしまうような状況にどう応えるかというものであった．4 章で論じたように，「人間」の境界が揺らぎ，人間存在そのもの，人間の（とりわけ近代の）社会の在り方（ways of being）が問われるなかで，本稿冒頭のメルッチの言葉に即して言うなら，「どこに私たちの境界線を置くのか，これが人間生活の向き合うべき」難題（challenge）となった．すなわち，人間と社会の在り方の再定義・再構成をも視野に入れたかたちで，〈“惑星社会のフィールドワーク”はこの課題を引き受け／応答するものたり得るのか．そのためにはいかなる条件があるのか？〉を問うこととなったのである．

この根本的な“問いかけ”については，ヨーロッパ研究ネットワークの創始者である古城利明（現中央大学名誉教授）から，境界線を引き直すことが困難である理由が述べられている：

> “境界領域”論がこの「物理的な限界」を取り込む「エピステモロジー／メソドロジー」を充分に練り上げていないからではないか，あるいは先送りしているからではないか．だが，すでに触れた「3.11 以降」の状況を踏まえれば，この問題をいつまでも先送りするわけにはいかない．さしあたりそれは，新原のいうように，「“生存の在り方”を問う」なかで，また「人間の境界線」の揺らぎを問うなかで自覚的に取り上げられるべきであろう．だがその「エピステモロジー／メソドロジー」とは何か．ここに残された課題があるように思う．「惑星社会」から「惑星」を展望に入れた「エピステモロジー／メソドロジー」，それは宇宙論を前提とした身心論なのか，空無を覗き込んだ現象学なのか，課題は深い[31]．

この課題は，難題（challenge）として残されたままではあるが，サルデーニャやコルシカ，イストリア，アルプス山間地などの地中海ヨーロッパ，バルト海のオーランド，エステルスンド，ロスキレ，さらにはブラジル，マカオなどでのフィールドワークのなかで，“境界領域を生きるひとの智（cumscientia humana in cumfinis）”と出会い続けていた[32]．

31） 古城利明「再び“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”へ」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部，2014 年，442–443 頁．

32） 新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部，2014 年，新原道信『ホモ・モーベンス―旅する社会学』窓社，1997 年などを参照されたい．

“未発の瓦礫”が顕在化した現在的状況のもとで，生かされるべきは，上記のフィールドワークのなかで，うっすらとふれることが出来た“異境の力（una capacità nello stato ‘di confine’, a capacity in the ‘different boundary’ state）”についての考察である．

“異境の力”は，第一に“異境で生き抜く力（capacità di vivere oltre i confini, ability to live beyond borders）”であり，第二に，その生の意味をふりかえることによって，複数の“異郷／異教／異境（terra estranea/pagania/confini estranei, foreign land/pagandom/extraneous borders）”の地を行き来し生き抜き，尚かつその意味を理解し表現しきるという意味での，“いくつもの異境を旅する力（capacità di viaggiare nei vari confini, ability to voyage in various borders）”である．

そして第三に，穴だらけで，不備や欠陥があったとしても，おおかたの予想を裏切り，「同郷人」たちをはっとさせるような新たな見方（nuova visione）を提示する力，すなわち，異なる境界線の引き方，補助線の引き方を提示することでその場の“メタモルフォーゼ（変身・変異）”を誘発する“異境を創り直す力（capacità di ricomporre i confini, capacity to recompose the ‘different boundary’ state）”となる．

この“異境の力（異なる境界線の引き方，補助線の引き方を提示することで“メタモルフォーゼ（変身・変異）”を誘発する力）”についての考察は，「3.11」の前になされ，「3.11」も断続的にフィールドの意味を再定義・再構成してくなかで見直されてきた[33]．「答えなき問い」を問う力を，“異境の力”として再定義することで“共存・共在の智”へと向かうことが，本稿の問いへの応答の第一である．

7-2.“多系／多茎の可能性”の“サルベージ（渉猟し，踏破し，掘り起こし，掬い／救いとる）”

過去に行ったフィールドワークの多くは，作品としてまとめられている．しかしながら，いまの時点でふりかえってみると，何を発見していたか以上に何を見落とし，何を書かなかったのか（作品化しなかった／出来なかったのか）のなかに，むしろ“多系／多茎の可能性（the possible routes to the various alternative systems）”が埋め込まれている[34]．

33）「3.11」以前には，新原道信「A. メルッチの“境界領域の社会学”―2000 年 5 月日本での講演と 2008 年 10 月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学･社会情報学 20 号（通巻 233 号），2010 年，51-76 頁において考察した．「3.11」以降も，新原道信「A. メルッチの“未発の社会運動”論をめぐって―3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（3）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 26 号（通巻 263 号）2016 年，113-130 頁などで考察を継続した．

34）“サルベージ（salvage, salvataggio）”については，新原道信「A. メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ―『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 21 号（通巻 238 号），2011 年，27-65 頁において実例を示している．同論文においては，フィンランド南スオミ州の都市ラハティ（Lahti）からさらに，車で一時間ほど移動して，ヘイノラ（Heinola）をこえ東スオミ州の湖畔の港町ミッケリ（Mikkeli）の近

“サルベージ（salvage, salvataggio）”は，「“居合わせた”事実を，調査者の体験（research experience）と結び合わせ，時間・空間を領域横断するかたちで再構成していく．そのときは理解できなかったが，実は，何が起こっていたのか，何が予見されていたのか，調査者である『私（たち）』は何を見過ごしたのかをつかみ直す試み」である[35]．

この作業（フィールドの再定義・再構成というワーク）は，今後なされていくべきものであるが，たとえば以下のような問いを立てることが出来る：

① サルデーニャでの長期滞在型のフィールドワークを作品化した『ホモ・モーベンス —— 旅する社会学』（窓社，1997年）や『旅をして，出会い，ともに考える』（中央大学出版部，2011年）において，ポーランドからの難民であり，家族づきあいもしていたアグニエシュカ（仮名）のことをなぜ書かなかったのか．大文字の「事件（チェルノブイリ原発事故）」と，かたわらの生身の“受難者／受難民”とが，なぜつながらなかったのか．

② バルト海のオーランド調査を作品化した「深層のアウトノミア」[36]において，なぜ，クリミア戦争時代の1854年の戦闘で破壊されたボマルスンド要塞跡（Bomarsunds fästningsruin）の歴史的意味を語る遺跡保存プロジェクトリーダーの言葉を，オーランドから見た世界（史）という観点から捉えきれなかったのか．アレクシエーヴィチの視線に即して見た場合のバルト海の島々の民は，何を記憶しているのか．

③ スイス山間地でのフィールドワークはまだ作品化できていないが，イタリア側のボルツァーノから国境を越えて入ったミュスタイル（Müstair）谷 —— イタリア，スイス，オーストリアという多方向に開かれたラディーノ文化圏の土地 —— で寄宿した1250年創業

くの針葉樹森と遠浅の湖が在る湖沼地帯にあるバンガローで，ノルウェーへの旅から帰ってきたミッケリ出身のフィンランド人の友人家族とともに過ごし，ヘルシンキからウイーンに飛んで，そこから「冷戦の時代には近くて遠かった」スロバキア共和国の首都ブラチスラヴァを経て，サルデーニャへと「帰還」するというフィールドワークが前提とされている．そのうえで，ドイツの著作家H．エンツェンスベルガー（Hans Magnus Enzensberger）の『嗚呼！ヨーロッパ 2006年に記されるエピローグと七つの国の知覚（Ach Europa! Wahrnehmungen aus Sieben Ländern mit einem Epilog aus dem Jahre 2006）』（Enzensberger, Hans Magnus, *Ach Europa! Wahrnehmungen aus Sieben Ländern mit einem Epilog aus dem Jahre 2006*, Frankfurt am Mein: Suhrkamp, 1987（＝石黒英男他訳『ヨーロッパ半島』晶文社，1989年）との“対話的／対位的なフィールドワーク（ricerca sul campo dialogante e poli / disfonico）”を試みている．

35） 新原道信「“うごきの比較学”にむけて—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求（1）」『中央大学社会科学研究所年報』21号，2017年，82頁．

36） 新原道信「深層のアウトノミア—オーランド・アイデンティティと島の自治・自立」古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部，2006年，397−430頁．

の宿屋の主人は，なぜ，1499 年の「カルヴェン（Chalavaina）の戦い」を語り継ぐのか.

上記①の問いは，本稿 5 章の身体をめぐる問題と 6 章のチェルノブイリ後の「新しい事態」とかかわる．アグニエシュカは，チェルノブイリ事故直後の冷戦下のポーランドで，放射能汚染により子どもを産むことが出来なくなるのではという危惧から，イタリアに亡命し，サルデーニャ人の夫との間に子どもを授かった.

上記②は，6 章のベラルーシでの「（戦争とチェルノブイリが）この土地の歴史を語る話のすべてとなる」とかかわる.

上記③は，さらに長期持続の歴史のなかでの土地の記憶とかかわり，同時に牧畜を営む人々にとっての人間と動物を循環する“異物”という現在的問題が在る.

過去のフィールドワークに，いままさに進行中の人間と社会の“うごき”から“サルベージ”していくことで，見逃していた“多系／多茎の可能性”を探求していくことが，本稿の問いへの第二の応答である.

7-3.“多系／多茎”のフィールドの想像／創造にむけて

本稿では，人間と社会そのものの在り方（ways of being）を捉えるためのフィールドワークの再定義・再構成 —— 私たちの境界線をどこに置くのかという想像力の問題について考えてきた．それは，境界線を引き直す“異境の力（異なる境界線の引き方，補助線の引き方を提示することで“メタモルフォーゼ（変身･変異）”を誘発する力）”であり（7-1），この観点から，見落としてきたものに気付くための“サルベージ（渉猟し，踏破し，掘り起こし，掬い／救いとる）”を考えた（7-2）.

ここでのフィールドは，領域であると同時にひとつの“うごき（nascent moments/processes, momenti/processi nascenti）”，すなわち，プロセスにしてモメントであった．フィールドを，このようなかたちで，“組み直す（recomppore, recompose）”という営為は，フィールドへの想像力に加えて，創造力とかかわってくる．すなわち，フィールドワークの“想像／創造力（immaginazione/creatività, imagination/creativity）”である.

メルッチは，筆者への「遺言」[37]となった「リフレクシヴな調査研究にむけて」のなかで，以下のように述べている：

37） Melucci, Alberto, “Verso una ricerca riflessiva”, registrato nel 15 maggio 2000 a Yokohama, 2000（＝新原道信訳「リフレクシヴな調査研究にむけて」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部，2014 年，93-111 頁．テープに録音された「リフレクシヴな調査研究」についての論考は，投宿先の横浜のホテルで，「昨夜は比較的体調がよかったので，頭に浮かんだことを吹き込んだよ」と言って手渡されたカセットテープのなかにあった.

調査対象の当事者における創造力を調査研究するということは，その創造のプロセスを理解するための認識の方法を研究グループ自身が創造しているのかという問題も含めてリフレクシヴとならざるを得なかった．この意味でのリフレクシヴな調査研究のあり方，自らが観察するものへの視線のあり方を自らにも向けるというあり方は，これまでのことなる位相でおこなわれた調査の歴史すべてにも向けられ，これまでこれからの調査活動のプロセスすべてに対して，徹底的なリフレクションを求めることになる．調査研究の成果のとりまとめにあたっては，創造活動そのものと同時に，その活動を理解しようとした認知のプロセスそのものにも焦点をあてることとなった．

こうして，創造力という概念には複数の意味が組み込まれたものとなり，この認識のあり方が調査研究グループ内部にも組み込まれ，これまでの調査研究のプロセスそのもののなかにある多重性が顕在化した．この自らに対してもリフレクシヴな調査研究の実践を通じて，社会を認識するための調査研究の意義を鼓舞する多元的で双方的な性質の意義を再確認したのである．

ここでは，社会調査における調査主体と当事者との関係性が，実は，可視的なレベルのみならずメタレベルのコミュニケーションにおいても成り立っていることに着目している．そして，当事者の側のみならず調査主体の側にも複数性と多重性があり，それぞれに固有性を持った個々人同士の二者の関係性が，「遊び（gioco, play）」をもって，ゆるく固定されたピボット・ピンのように揺れ動いていくなかでなされる営為として，社会調査をとらえている．さらに，このプロセスを，メタレベルも含めて丹念なリフレクションを行い，複数の目で見て，複数の声を重ねて，固有の二者関係をもとにして当事者にも調査結果を返していく（その意味で，お互いに照り返していく），持続的なリフレクションについての提案がなされていた[38]．

本研究チームにおいても，メルッチの遺志を引き継ぎ，複数の目で見て，複数の声を聴き，複数のやり方で書いていくことを集合的にやってきた．“うごき”の場を“ともに（共に／伴って／友として）”し，ともに“居合わせ”，「フィールドのなかで書くこと（writing in the field, writing while committed）」を同時進行形でし続けた．そのスタイルについては，『うごきの場に居合わせる』のなかで，“乱反射するリフレクション（riflessione disfonica, Dissonant reflection）”という言い方をしている[39]．この同時進行形のスタイルに，前述の“サルベージ”

38） 新原道信「A. メルッチの“未発のリフレクション”―痛むひとの“臨場・臨床の智”と“限界状況の想像／創造力”」矢澤修次郎編『再帰的＝反省社会学の地平』東信堂，2017年，123頁．

39） 新原道信「乱反射するリフレクション―実はそこに生まれつつあった創造力」新原道信編著『うごきの場に居合わせる―公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部，2016年，417–456頁．

をしながら，境界線を引き直し，不規則な断片（フラクタル）を寄せて集め，複数の目で見て，見過ごしてしまった“多系／多茎の可能性”を“すくい（掬い／救い）とり，くみとる（scoop up/out, scavare, salvare, comprendere）”ことが，本稿の問いへの第三の応答となる．

このようなやり方（ways of doing）であるならば，「フィールドに出られないフィールドワーク」も可能であり，研究チームの各氏や，当事者が遺したメモなどは，複数の目で“サルベージ（渉猟し，踏破し，掘り起こし，掬い／救いとる）”ことも可能となる．ここでの“乱反射するリフレクション”は，さらに“多重／多層／多面”的なものとなることによって，解釈の“多系／多茎の可能性”を確保し，そのことによって，「解釈の配置変えをしていくことに対して開かれた理論（teorie disponibili）」[40]となっていくはずである．

7-4. ま　と　め

本稿では，“「壁」の増殖”と“パンデミック”，さらには，すでに“予感（doomed premonition, premonizione dell’apocalisse）”されている困難な（challenging）「新たな事態」のなかで，“かたちを変えつつうごいていく（changing form）”ことが出来るフィールドワークを探求してきた．

“探求型フィールドワーク（Exploratory Fieldwork, lavoro esplorativo sul campo）”は，フィールドで，フィールドからの問いを探求していくだけではない．フィールドの境界，フィールドでのうごきの境界を意識的に“組み直し”ていくことそのものを“探求するフィールドワーク（Exploring Fieldwork, lavoro esplorando sul campo）”でもある[41]．

予測を超えるかたちでうごいていく社会から影響され，調査者自身も変成していくことも含めてふりかえり，“対話し問いかけ合う（dialogando/interrogando vicendevolmente, dialoguing/asking question each other）”――フィールドそのものを設定し直していくことを日々の営み（デイリーワーク）としているかを，日々，24 時間，問い続けることとなる．

追記：人間と社会の“うごき”に対して，常に自分たちを開いていくことを旨とする本稿を準備する途中に，ロシアによるウクライナへの軍事侵攻のニュースが飛び込んできた．国境線の移動のなか，必死に生き抜いた人々のこれからをただ想うのみ．

40）Melucci, Alberto, “Verso una ricerca riflessiva”, registrato nel 15 maggio 2000 a Yokohama, 2000（＝新原道信訳「リフレクシヴな調査研究にむけて」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部，2014 年，103 頁．

41）前述の『うごきの場に居合わせる―公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部，2016 年での「フィールド」であった「湘南プロジェクト」と「聴け！プロジェクト」は，いずれも，本研究チーム（市民活動の担い手や当事者も含まれるかたちでつくられ，「世代交代」をしながら続いてきた）が，参与的な調査研究の「フィールド」として創り続けた“うごきの場”であった．詳しくは，同書の中村寛，野宮大志郎などの文章を参照されたい（457–483 頁）．